



1981年(昭和56年)

3月号(No. 429)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価一部 150円

目次

東海支部 20 周年記念日本=ネパール 国際親善隊派遣報告(上).....(1)	第 18 回「この一本展」(2).....(2)
日本冬期エベレスト登山隊報告 (植村直己).....(3)	東西南北.....(4)
ディーレンファース氏のメッセージ 毛勝谷 ヘルリヒコフパー氏からの手紙 図書紹介.....(5)	「続々・文庫に入っている山の本」 「Geographical Contribution to a Periglacial Study」
委員会報告.....(8)	科学委員会、婦人懇談会 青年懇談会
追悼 竹中昇君を悼む.....(8)	竹中昇君の遺稿
会務報告・ルーム日誌・会員移動(10)(11)	図書受入報告(図書委員会).....(11)
カット/芳野満彦・松本真太郎・吉阪隆正	

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時〜20時
水、金曜 13時〜20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時〜20時

お知らせ

▽第九回山岳史懇談会

大正時代の積雪期剣岳、
槍、穂高登山の話

講師 三田幸夫氏
日時 3月30日(月)午後
6時30分より

場所 本会ルーム
図書委員会

東海支部二十周年記念

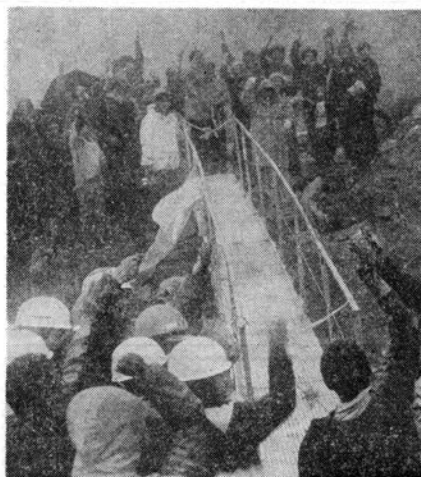
日本=ネパール

国際親善隊派遣報告(上)

一、はじめに

今年四月で二十周年を迎える東海支部は数年前から記念に海外登山隊の派遣を考えていた。しかし従来の海外遠征を一步進めた形での計画段階での声だった。自分たちができる範囲内でネパールに民間協力しようということだった。尾上支部長が支部報23号で言うように、ヒマラヤの存在なくして今日の日本登山界の隆盛は語れない。そのヒマラヤはネパールの人々あつてのこと、このネパールの人々への感謝の気持ちが根底にあればこそ思いついたことなのだ。

一九七八年エベレスト登頂25周年式典でネパールへ招かれた湯浅道男支部会員が帰途ガウリサンカ



橋が完成し開通式を行う／朝日新聞社提供

ール登山許可の可能性について打診した。同会員が招待飛行で上から眺めた厳しく、気高い山容と、東海支部設立直後この山の登山許可を申請したいきさつから、全員

異議なく山はガウリサンカールを第一候補と決めた。同年秋、G峰登山の正式交渉と現地の人々に何が協力できるかを話し合うため、湯浅会員が再度ネパールへ飛び、ルムビニ委員長とのダルシャン氏など観光省の要人と会談し、現地の人々の要望を知るため同会員と旧知の間柄のパウデル氏にロールワリ地区の調査を依頼した。

一昨年末から昨年初めには市橋隆二会員をロールワリ渓谷に送り、BC地点の確認、現地の要望などを調べさせた。この結果、

(一) 協力事業
1、ロールワリ
ーリン谷
での架橋

- (二) ガウリサンカール峰東南稜の登攀
- 総指揮 尾上昇、隊長 湯浅道男、副隊長 中世古隆司(総務)、土本美宣(協力)、市橋隆二(登山)の3名、登攀隊長 山本一夫、以下隊員総数32名、内女性5名、年令20〜65歳で平均30歳、他に報道関係(朝日新聞、名古屋TV)2名。登山に参加したものは全員の内18名。
- 二、カトマンズ

一九八〇年七月二十七日、ほぼ全員がカトマンズに集結した。翌二十八日より早速それぞれの任務についた。カトマンズ滞在中女性

山をきれいにして「三」は持ち帰ろう

を中心とした教育隊は日ネ友好協会事務局長のバルマ氏の案内で幼稚園、小学校、孤児院などを訪ね、器楽演奏、教育資材(主に演奏に使った楽器、文房具、スポーツ用品など)を寄贈し、児童、生徒と交流しながら教育事情を視察する。

陶磁器産業の本場の一つ、岐阜県土岐市の好意で参加された土岐市陶磁器研究所の大塚所長は、連日市内外を駆けまわり、レンガ工場、土器製造所の視察と陶器に適した土の採取を行い、われわれが健康を心配するほど毎日夜遅くまでサンプルの整理をされていた。帰国後の調査結果では大変有望とのこと。現在すべてを輸入に頼っているネパールでも、順調にいけばネパール産陶器が生まれ、経済

的にも期待できそうだ。

三、キャラバン

隊員数が多く、その上架橋用資材、教育施設用器材など登山以外の荷物も大量にあり、隊を八月三日、五日、七日と三つに分けて出発した。道路崩壊でチャリコットまでバスが入らず、パルビシよりキャラバンを開始。モンズン期で途中雨と蛙の大群に悩まされ通しだったが、この期ならでは多種類の咲き乱れる草花と、何本もの美しい滝を見ることができた。

最も難儀させられたのは橋の資材で、二メートルの鉄骨は下りの際ポーターの足をしばしば傷つけ、このようなことのため途中ポーターを見つづけるのに苦労した。十六日、全隊員が最後の村ベディンへ集結した。キャラバンの途中の数カ村にも文房具などを寄贈し、大変喜ばれた。



カット／芳野満彦

四、ベディン村

ベディンにはヒラリー卿が寄贈した小学校があるが、建物の中はがらんとしていて、運ぶのに苦労した長いテーブルや黒板、その他各種文房具、書籍などをわれわれが贈って、中に運びこむと、やつ

と学校らしくなった。女子隊員は滞在中楽器の演奏法やソロバンの使用法などを教えた。楽器の使い方はシェルパ族の方が日本人より早く覚えるように思えた。

われわれが一番心配していた架橋は、素人にも造れて長期使用に耐える橋ということで日本にいる時も随分悩んだ。幸いなことに支部の大口瑛司、蔭山淳両会員の勤務する鋼材会社が組立式の軽量鉄骨人道橋を製造し寄付して下さって、解決した。この橋の組立て訓練は両会員の指導を受け日本で十分行っていた。

場所は村民の希望で小学校のすぐ上の、ロールワリン本流に右岸から落ちこむ沢に決定した。これは村民がカルカへ行くために一番よく通る場所であり、以前事故が起きたこと、また小学校のすぐ近くであることなどによるもの。橋の組立てはマスターしていったものの、正直なところ基礎造りにはあまり自信が持てなかった。しかしシェルパ族の天才的とも言える石割り、石積み技術のおかげで杞憂に終わった。また湯浅隊長が73年のエベレスト遠征で雇ったハクパ・リジン氏が村のパンチャットの中でもリーダー格だったことなどあって、村民の積極的な協力が得られた。老いも若きも、男も女も交替で馳つけ、村民と隊員は一致協力、同じ仲間のように働いてくれた。架橋にはTVカメラマン

第十八回

「この一本展」より (2)

四、初版

伊犁紀行上・下 日野 強 著

明治四十二年博文館

日野強(陸軍歩兵少佐)の伊犁紀行については、戦後の再版本もあり、広く読まれていると思う。にもかかわらず、あえて出品したのには、今日では必ずしも入手容易ではないと思われる明治四十二年の初版本だからである。昭和十四年十二月に、私は本郷の玉英堂書店で金十五円を投じてこの本を購入している。(同店の領収書参照) よく覚えていないが、月給が百円そこそこの頃の十五円は、若いサラリーマンにとってはかなり高い本にはいる。

今から七十二年前、陸軍歩兵少佐の日野強は、北京から単身新疆省へはいり、哈密(ハミ)―烏魯木齊(ウルムチ)―伊犁(イリ)の地域を探ぐり、喀什噶爾(カシュガル)から葉爾羌(ヤルカンド)、そして高山病に耐えながらカラコルム峠(五五七五)を登り、引き続き五千級の峠をいくつも越してラダックのレー(到達、さらに四千級のフォト・ラ、風雪のゾヂ・ラを突破してスリナガルに至っている)。

その間一年余を費やす大旅行である。私が、リトル・チベットといわれるラダックやレーなどという辺境の地域のことを知り、かつ興味をもったのは、この本を買ったときからだからかなり古いことになるが、それから更に四十一年めの今年の夏、ようやくラダックにはいり、レーに数日滞在する機会を得た。眼の前にストック・カングリなどザンスカールの雪の峰々を仰

ぎながら、日野少佐の業績を偲んだのである。

日野少佐は、スリナガルへたどりつくや、旅装をくいとまもなくその足で、探検・登山家として高名な英国の軍人ヤングハズバンド(当時大佐)を表敬訪問し、中央アジアの旅について語り合うとともに、記念に彼の乗馬を贈呈している。ロシアの將軍ステッセルが乃木將軍に愛馬を贈った水師營の故知にならったものだろうか。

苦勞をともにした馬を、土民の手に処分するにはしのびなかったからだと述べているあたり、一介の武弁ではない日野の人間味がうかがえて興味深い。

五、青い夜道

田中冬二 著

昭和四年 第一書房刊

特製版

著者は一八九四年生れ、一九八〇年(昨春)歿。その作品は山村風物詩が殆んどで、しみじみとした情感に富み、山を好む人々に限りない郷愁の念を抱かせる。山の雑誌にも多く掲載され、愛好者が多い。

本書はその処女詩集で、これにより詩人としての位置を確立した。この後「海の見える石段」(昭和五)、「山鳴」(昭和一〇)、以下十冊以上の詩集が出ている。本書見返しのもうき暖白の音に更けゆく秋の夜や

新蕎麦の香りもうす寒く

ああ、むかしはものを思はさりけり

とは、著者が安田銀行長野支店在勤(昭和十五年)頃、書いて頂いたもの。最も詩作に油がのっていた時代であった。

川崎精雄

六、コーカサス登山の

古典二種

に同行してきた、エベレスト女子隊のサーダーだったアンツェリン氏が活躍してくれ大助かりだった。

二十四日、橋の本体が対岸に届いた時は、兩岸の隊員と村民の間から思わず歓声と拍手が湧き起こった。二十五日午前、橋は完成した。午後小雨煙る中で開通式を行った。次々と橋を渡って来る村民から隊員の一人一人に花束が渡

日本冬期エベレスト

登山隊報告

植村直己

ネパール政府が冬期登山を解禁して二年目、昨年のポーランド隊に続いて私たち隊員十七名(登攀六名 学術五名、報道六名)シェールパ二十五名の冬期エベレスト登山隊は昨年十二月一日より本年一月三十日まで六十日間登山活動を行い、主目的のエベレスト冬期登頂は失敗に終わった。また重ねて、隊の一員、竹中昇君を失う事故まで起してしまった。

登山は前半風の弱い快晴続きとなり、危険なアイスフォールも三日間で工作、C1(六〇〇〇)、C2(六五〇〇)、C3(七三〇〇)を十二月二十五日に建設、さらに最終キャンプ、サウス・コルへのルート工作も行って、快調なペースでアタック態勢に入っていた。



カシミール・スリナガールの北のスキーム / 吉阪

「こんな晴天続きならポスト・モンズンより登りやすい」と初めて冬を経験するシェールパたちと話していたほどだった。ところが、クリスマス イブを境にして天候

された。建設中、石運びに一番張切った若いM隊員にガガ(シェールパの老婆)の花束が集中したのは愉快だった。翌日の夜、彼らは大切な財産の羊を数頭料理してわれわれを歓待してくれた。こうして橋を架けている間にも、われわれは交替でBC地点の偵察をし、上のカルカ、さらにその上の氷河湖などで、高度順応をかね行動していた。

1. The Exploration of the Caucasus
by D.W. Freshfield, Arnold, 1896
(百瀬限定本) (写真 Vittorio Sella)
2. The Frosty Caucasus
by F.C. Grove, Longmans, 1875
(無添 E. Whymper)

わが国にはなじみが薄いのが、欧州アルプスの主要峰に登りつくされたとき、次の目標に選ばれたのはコーカサスの山城だった。

一八六八年に先頭を切ったのはダグラス・フレッシュフィールドの遠征隊で、次いで七四年にはF.C. グローヴの隊が入った。

出陣したフレッシュフィールドの探検記は、第一次のほかに八六、八九年の成果もあわせて、一八九六年に刊行されたもの。山岳写真家として第一流とされたセルラとドンキンの作品が眼を惹くとともに、八八年この山城に没したドンキンに対する著者の深い哀惜の情があふれて胸をうつ。

グローヴの探検記録はムーア、ウォーカー、ガーディナー等で登り歩いた折のもので、エルブルズ主峰の登頂もふくまれている。本書の挿絵は、ウォーカーの写真をもとにウインパーが刻んだもの。なおグローヴはマッターホルンのイタリア側から、登山家として最初に登ったことでも有名である。

この二種とも稀少書ではないが、前者は限定百部の特装本であり後者はリバインドの装幀が好ましいので、お目にかけることにした。(前者は上下二巻だが、重くて手に負えないので、上巻だけ持参しました。ご容赦を願います。)

島田 興

七、浅草に築かれた

木造の富士山

1 富士山繁栄の図

幾英筆 明治二十年十一月

横山良八出版

2 当世商人登山の戯

国政筆 明治二十一年一月

福田熊次郎出版

江戸の人間にとって富士山は「半分は江戸のものなり富士の雪」でもわかる通り、大きな憧れの存在であった。ところが駿河の国は現在のアマゾンやサハラ砂漠を訪れるほどの距離であったのだらう。江戸の地に数多くの富士山を模した代用品の築山を造り、宗教的欲望を満足させていた庶民は少くなかった。

文明開化を迎えた明治の二十年になって、江戸の中心浅草に木造の富士山が築かれていたことを私はつい先年まで知らずにいた。今はない瓢箪池の西側に造られたものである。展覧する二組の版画から高さは十八間、即ち約三十三メートル、裾野廻りは一五〇間、約三七〇メートルにおよぶ巨大木造建造物であった。

関根吉郎

八、小谷部全助君の山日記

小谷部君は昭和七年から十三年三月卒業するまで、東京商大(現一橋大)山岳部にあって活躍したが、終戦の昭和二十年十二月、長く患っていた肺結核のため、富士見高原療養所で亡くなった。三十一歳であった。

いま私の手許に彼の十数通の手紙と二冊の山日記が遺されているが、ここに展示したのはその一冊、一九三四年(昭和九)版で、それには同年六月の白峰三山縦走、七月の夏山、八月の木曽駒縦走、十一月の鹿島槍天狗尾根、十二月

上部ではマイナス三十度〜四十度を超す厳しさになった。年内のアタックも考えていた折ひとまずベースキャンプに下り休養をとった。年が明け約一週間の休養をとった後、登攀メンバーは二班に分け一月五日、六日の二日にわたって出発した。B Cを出て二日目C2、C1で足止めをくい、さらに第一次アタック隊(植村、松田)がC3からサウス・コルの最終キャンプへ向かう途中、強風で到達できず、C3へ引き返し後続の第二次アタック隊(竹中、三谷)に合流、ガスと強風で停滞。テントの外に置いたザックを吹き飛ばしたり、われわれのテントのポールを折る風速20〜30級の強風が吹き荒れた。ここで、一次隊の体力の消耗によりアタックを一次から二次へメンバーチェンジし、テントの中で晴天を祈った。竹中君もアタックへの意欲を燃やして準備をしていた。食欲も皆と変らず体調の変化もみられなかった。翌一月十二日、風は前日より弱くなったものの風でガスはサウス・コルより上部に雪煙のように舞い上り、上部へ向かうことは不可能であった。このまま停滞することは体力の消耗になるだけとわれわれは下降を決めた。竹中君の事故はこのC3からの下降中に起きた。

C3に入っていた隊員五名(阿久津カメランも含む)シェルパ九名が全員下降開始、私は手足に凍傷を負ったシェルパ二名をつれておりていた時、後に、竹中君の悲鳴のような声を聞いた。固定ロープのハーケンに止まっている彼を見た。

私は竹中君のところへかけ登りからんだロープと彼のルックのバンドを切りはずし、楽にさせ介抱するも彼は力つきたように動かなくなり、息をひきとった。

彼の遺体はB Cに降しトウクラ(四九〇〇)で茶毘に付した。われわれは彼の遺志とみなし再度のアタックを試みることを決意し、一月二十日B Cを出発した。



バーモントのスキー場にて／吉阪

しかし、天候はわれわれに味方せず、C2で五日間停滞を余儀なくされた。

六日目悪天につきC3に入り、最終キャンプをサウス・コルに建設しアタックをしようとして出かけていったものの、デポしておいた食料が烈風に吹き飛ばされてないことを知ったとき、無念のうちに登頂断念を決意した。竹中君の遺灰

の鹿島槍東尾根、翌十年四月、五月の富士山、などの登山日誌が詳細に綴られている。予科三年(二十歳)の頃で、山登りに明け暮らしていた時代だ。北岳バットレスや荒沢奥壁の積雪期初登攀以前のものである。

彼自身で作製したルート図のほかに、他書から写しとったルート図が何葉か書きこまれていたのも、彼なりに先人の足跡をよく調べて行動していたことを立証している。

私とは予科から同じクラスで、年齢も同じ、いま生きていてくれたら、と思う一人である。

望月達夫

九、富士山東表口登山道

開鑿に関する記録

筆者 伴野京治

昭和九年二月稿

本書は富士山御殿場口登山道を開いたときの諸記録をまとめたものである。

を頂上へ埋められず残念だった。

ジェネバ スパに埋めた。

エベレストの冬期登攀にわれわれは全力をつくしたが、厳冬のエベレストには力がおよばなかった。

前年の偵察、ポーランド隊を参考にしたが装備の改良、シェルパの問題、隊長としての不肖など反省すべきことがある。西稜から挑んでいた英国隊、ローツェ峰の伊隊も断念した。

沢山の方の協力を頂きながら、事故まで起こし、多大な迷惑をかけてしまいました。

登攀メンバー 植村直己、土肥正毅、菅沢豊蔵、竹中昇、松田研

マン・ディーレンファース氏から

「この一本展」より(2)

次のような書簡を受けとった。日本山岳会の会員たちへのメッセー

ジともいふべき内容なので、当会報上でご披露したい。

「あ、これは愉快だ、アメリカのエベレスト隊の隊長と同じ名前じゃないですか、」一群の日本人科学者が、アラスカのカトマイ国有記念公園内のキング・サーモン

近くで、第二次大戦中に作られた飛行艇から降り立って、私と名刺交換をしたときのこと。名刺には「北海道大学低温科学研究所 シミズ・ヒロム」と刷られていた。

彼とその仲間たちは研究計画に従



ディーレンファース氏のメッセー

国際的に著名な岳人であるノーマン・ディーレンファース氏から

山崎安治

普通、一般には御殿場口といわれているが、正式には東表口登山道と呼ばれていたことも本書は裏付けている。この御殿場口が何時作られたか、あまり知られていないが、こゝは明治十六年(一八八三)、いまから九十三年前に新しく開かれた登山口なのである。

この開発を志したのは御殿場町の伴野佐吉翁で、明治六年のことであり、以後何度も静岡県令(いまの知事)に許可願いを提出し、明治十五年六月十五日ようやく許可が下りた。すぐ工事に着手し明治十六年八月十七日、開通式が行われた。その間の事情をしるした佐吉翁の手記と諸願届書を全部本書に一括してあり、当日の祝儀金額などもこまかく記され、静岡県令大迫貞清は金十円也を寄進している。

それ以後の登山道の修理、記念碑建設のことなども記録されていて、当時の富士登山に関する貴重な資料となっている。

事中であり、私はアメリカ内務省に依頼された映画の撮影中だった。それからほんの数ヵ月後、一九六五年一月に、思いがけず私はアメリカ国務省の後援による世界一周講演旅行の道すがら、サッポロで新しい友人たちと再会することになった。

アラスカでの出会いから十年のちのこと。私はハリウッドの俳優兼監督のクリント・イーストウッドとともにスイスのベルナー・オ

新書は、



中国・杭州の西方にある新安江ダム／吉阪

ーバーラントで「アイガーの制裁」を製作していたが、このときウエムラ・ナオミが私に思いもよらない贈り物をくれた。彼とイト

ー・レイゾウは、私が隊長をしていて不首尾に終わった国際ヒマラヤ隊のメンバーだった。その贈り物とは、五大陸の最高峰から持ち帰られた岩を一つにためあわせたものだった。わが良き友ナオミからのすばらしい贈り物に私は大いに感動した……

『山岳の世界』の日本語版刊行にあたって一言してあげてほしいとスイスの出版社からいわれて私は快諾した。それというのも日本山岳会とその会員たちの注目すべき努力、すなわち本書やその他の数多くの外国出版物、その中には私の父の書いた『第三の極地』や私自身の『エベレストに登ったアメリカ人』もふくまれるが、こうした出版物を日本語訳した努力への敬意の念あればこそだ。多くの人の名が思い浮かぶ——マキ・ユーコー、ヨシザワ・イチロー、マツカタ・サブロー、その他多勢——

山岳一般、とりわけヒマラヤ遠征に多大な功績のあった人々の名が思い浮かぶ。ヒマラヤ遠征に關して日本をしのぐ国は世界中にない。日本山岳会とその会員たちが、ヒマラヤにおける重要なできごととの最前線に立ちつづけてきたことは、周知の事実だ。

一九六九年秋、私たちがソル・クレーンブをトレッキング中にシェールパの伝令がエベレスト・ベースキャンプから一通の手紙をもらした。「拝啓、一九七〇年日本エ

文庫本の出版はその後にも相変わらず盛んで一向に衰えを見せない。山の文庫本も一ヵ月に一冊くらいの割合で刊行されている。たしかに、絶版になって入手困難な本が文庫本として出版されるということは、読者にとっては大変有難いことである。しかしこの文庫本ブームは結果的に功罪相半ばするといえる。安く手軽にというのはいえ、あまりに手軽過ぎる企画がある。また、本がその文章の他に持っているあの不思議な魅力、それは装丁や造本や印刷や用紙といったような有形・無形の色々なものから発するものであろうが、それが無くなってしまふ。

例えば「雪・岩・アルプス」にしても、文庫版では元版にあった研究、訳章、詩を全部カットしてしまつて紀行篇だけを収録している。これではこの書の



続々・文庫に入っている山の本

岩瀬晴祐

内容のようやく半分であり、古典をそのまま伝えるという文庫本来の姿からはほど遠いものになっている。しかもあの重厚な造本や、装丁、写真、用紙、レイアウトなどのすべてから感じることのできる一種のバタ臭さといったものはまったく表現のしようがない。

「北の山」にしてもそうである。坂本直行の潇洒な装丁、豊富な挿画、一見ラフに見えるが端正な造本、これらはあの文章とびつたりマッチして「北の山」を形造っている。

本は紙に文字を印刷して綴じ合わせれば良いというものではない。長い間多くの人々に読まれ、大切に保存され、また次の時代に受け継がれていく本は、内容、造本、装丁が一体となつて一つの「書物」として独特の雰囲気を出しているものである。そしてそれが読む人に目に見えない影響を与える。

その意味からも、文庫本で初めて山の古典を読んだ人は、是非ルムの図書室などで元版に親しんで頂きたいと思う。

今回も前回と同じように蛇足とも思われる書誌的解説をつけ加えてリストを作成した。

(1)雪・岩・アルプス 藤木九三 二三五頁 三〇〇円 昭和五十四年六月十日発行 中央公論社

元版は昭和五年梓書房から刊行された。この文庫版には元版にあった「研究」「訳章」「詩」等が除かれ、ヨーロッパアルプスと日本アルプスにおける登山紀行だけを収録している。解説はRCC以来の仲間、水野祥太郎が書いています。

(2)山とある日 上田哲農 二二頁 二八〇円 昭和五十四年七月十日発行 中央公論社

「日露の山ひなの山」に次ぐ第二画文集。元版は昭和四十二年十一月三笠書房から刊行、元版の解説は安川茂雄が書いていますが、この文庫版では著者と同じ日本登山会の高橋一也が書いた。

(3)初登攀行 松本竜雄 三〇五頁 三六〇円 昭和五十四年九月十日発行 中央公論社

谷川岳一ノ倉、前穂高東壁、滝谷などに記録した初登攀のかがずかず。元版は昭和四十一年にあかね書房から出た。解説は元版の時と同じく望月亮が書いています。

(4)アルピニズム・アクロバチコ ギド・レイ 近藤等訳 二八五頁 三六〇円 昭和五十四年九月十五日発行 講談社

ヨーロッパアルプス岩壁登攀の古典といえる本書は河合亨の訳で昭和三十一年朋文堂から出版された。この文庫版は二十数

ベレスト遠征の第二次偵察隊々長として、貴方が日本山岳会に絶えず寄せられた御好意、とくに私たちが久しく望んでいたこの計画への御芳情に感謝いたします。アメリカ・エベレスト隊長である貴方に私は、貴隊の忘れ得ざるべき不運の結果につき御一報申し上げます。私どもは九月二十五日、アイスフォール下の私どものベースキャンプ近くでジョン・E・ブレインバック氏の遺体ならびに氏の手記の若干を発見しました。私ならびに日本山岳会々員はここにあらためて弔意を表し、故人の御冥福を祈ります。加えて、この件につき天の配剤の妙ともいふべき偶然を御一報申し上げます。日も同じ九月二十五日、故人への略式の葬儀をいとなもうとしていた折も折、たまたまタンポポチェの主任ラマ僧が、暗い雪の降る日にもかかわらず私どものベースキャンプを訪れました。故人がキリスト教徒であったことは承知しておりましたが、私どもは仏教の慣例に従った祈禱をしてくれるように求めました……ミヤシタ・ヒデキの署名のあるこの書状は、さらに私に指示を求めている。私たちはジョン・ブレインバックの遺品をタンポポチェに運ぶおろす手配をして、主任ラマ僧に正式な葬儀をおこなって貰った。それ以来、ゴムバの近くの墓所は数多くのトレッカーや登山者の訪問をうける。

た。一九六三年のアメリカ・エベレスト隊の隊員一同は、これを可能ならしめてくれたミヤシタ・ヒデキと日本山岳会に深く感謝している。

(宮下啓三訳)

毛 勝 谷

柿原謙一

前年の八月は梅雨明けがないような涼しさだった。大町滞在中の岳友から、お天気次第で雷鳥沢幕営、奥大日行をと誘われた。

週休二日を当てて同行を約し、大町駅に昼頃下車して驚いた。

「毛勝に参りましょう。若手二人の計画に便乗するのですよ」。否応なしにマイカーに乗せられる。

糸魚川―魚津―片貝川沿い車道を走った。片貝第二発電所が五時すぎで、阿部木谷まで乗り入れ、少々歩いて取入口上手の川原に幕営。

六時をすぎていた。東洋大山岳部のテント一張りを見たが、無人らしい。

雨雲が山をこめていたが、夜半にテントからでてみると星もみえる。明日はなんとかなるでしょう。

朝六時出発。徒渉四回ほどで一時間後に雪渓にとりつく。やがて大明神沢合流点となり、いよいよ毛勝谷の雪渓を登って、少憩を重ねながら一〇時すぎに雪渓を登りきる。岩石だらけの沢をつめるこ

年振りの新訳ということになる。巻末解説も訳者である。

(5) 泉を聴く 西岡一雄 二九〇頁 三四〇円 昭和五十四年十月十日発行 中央公論社

著者最初の紀行随筆集。RCのメンバーとの登山、専門とする登山用具の話などユーモアたっぷりに個性豊かな文章を綴る。初版は昭和九年明文堂から発行され、文庫版では海野治良の解説が加わった。

(6) マッターホルン北壁 小西政継 二一四頁 二八〇円 昭和五十四年十二月十日発行 中央公論社

昭和四十二年、日本人として初めての冬期マッターホルン北壁登攀の記録。元版は昭和四十二年山と溪谷社より出版された。文庫版の解説は近藤等が執筆。

(7) 雪山・蘆山 川崎精雄 三二六頁 三八〇円 昭和五十五年二月十日発行 中央公論社

著者最初の山の紀行随筆集。昭和の初めから三十年以上におたる登山の数々を流麗な文章で語る。解説は最も良き仲間望月達夫が書いている。元版は昭和四十四年若溪堂から刊行された。

(8) 垂直に挑む 吉尾弘 二五八頁 三三〇円 昭和五十五年三月十日発行 中央公論社

昭和三十二年から昭和三十八

年までの谷川岳一ノ倉、穂高屏風岩、前穂高東壁の記録集。元版は「垂直に挑む男」と題して昭和三十八年山と溪谷社から発行された。解説は豊田重彦が担当。

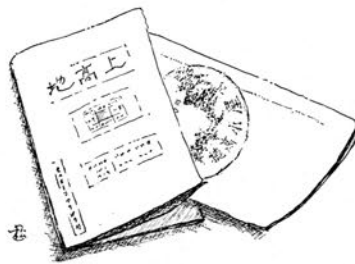
(9) 北の山 伊藤秀五郎 二二八頁 三〇〇円 昭和五十五年四月十日発行 中央公論社

山岳書の古典では最も人気のある本であろう。北海道の山々を詩情豊かに綴る紀行文。ロマン溢るる感想文など何度読んでも飽きる

ことではない。元版は昭和十年梓書房から発行された。文庫版の解説は大学の後輩林和夫が筆をとった。

(10) 幻想のヒマラヤ 村井葵 二四八頁 三三〇円 昭和五十五年五月十日発行 中央公論社

昭和四十年ローツェシャルに遠征した早大隊々員の個人手記。高所障害から人事不省となり約一ヵ月間も昏睡状態を続け、その間



上野高

不思議な幻覚を経験する。元版は昭和四十四年冬樹社から発行された。当文庫版には原真の解説が加わった。

(11) アルプスの空の下で 近藤等 三一〇頁 四〇〇円 昭和五十五年六月十日発行 中央公論社

昭和四十三年、四十五年夏、そして四十六年夏と三シーズンにわたるアルプス登攀の記録。元版は昭和四十七年白水社から刊行、文庫版に加えられた解説は大森久雄が執筆している。

(12) わが岩壁 古川純一 二六四頁 三四〇円 昭和五十五年七月十日発行 中央公論社

昭和二十八年から三十六年までに剣岳、谷川岳、穂高岳のバリエーションルートで行われた登攀の記録。元版は山と溪谷社から昭和四十年に発行されたこの文庫版には小森康行の解説が入った。

(13) 登山家の思い出 エミール・ジャヴェル 近藤等訳 二八四頁 三八〇円 昭和五十五年七月十五日発行 講談社

アルプスの伝道者といわれたジャヴェルはわずか三十六歳の短かい生涯であったが、そのアルプス登山の数々の美しい文章に残した。それを尾崎喜八が格調高い名訳で昭和十二年竜星閣から出版した。

(昭和二十七年角川書店より文

と一時間、それから草つきを登りだして道がでた。毛勝山西南の稜線に立ったのが正午。黒部側はこれまでも一変したきれいな草原で、お花畑もある。ここに立つまでときどき晴間もでて、カンカン照らされずに登ることができた。

勝の三角点で四人で握手をしあう。田部さんの『日本アルプスと秩父巡礼』を読んで以来、一度は登りたいと思っていた手勝に、偶然にも登頂できた。若手の一人が、「思いがけぬ山へさそって、登り損なったりつまらない山だったりしたら、申し訳けないと思っていたのに、楽しく登れて本当に結構でした」という。ありがとう。おかげで頂に立てましたと感謝した。

登ってきたとおりに毛勝谷を降る。稜線のお花畑に別れたのが二時まえであったが、この降りには意外と時間がかかった。雪渓にとりつくまでに補助綱のサポートが二回。助かった。降るにつれてガスは濃くなり、歩きにくい。さっぱり行手が見えないし判りにくい。疲れもでてくる。雪渓の下端についたのが六時に近く、幕営地着が六時四十五分となつてしまった。若手二人は歯がゆかったらうに、文句も言わない。水割りウイスキーで寝につく。

帰宅してから『日本アルプスと秩父巡礼』をひもとく。田部さん

は明治四十三年八月と大正四年七月に、毛勝の頂上を踏まれている。いずれも魚津駅から歩かれた。あらためてその健脚ぶりに頭をさげた。

ヘルリヒ

コッファア氏

からの手紙

会報42号にヘルリヒコッファア氏からのエベレスト遠征の報告が載せてありますが、この時の前置きにあるミュンヘン大学名誉教授という肩書きについて問い合わせたところ、同氏から最近になって返事がきました。これによると同氏はミュンヘンに住んではいるが、オーストリアのザルツブルク大学の名誉教授で、専門は「気



候、風土の心理学的影響に関する基礎分野」とありました。同じ便せんには一九五三年のナ

庫版出版) 従ってこの文庫版は四十三年振りの新訳ということになる。

⑭屏風岩登攀記 石岡繁雄 二四七頁 三二〇円 昭和五十五年八月十日発行 中央公論社

昭和二十二年夏の穂高岳屏風岩登攀の記録が中心。元版は昭和二十四年九月碩学書房より刊行された。その後四十九年、五十二年と改訂版が二度出ている。本文庫版は四十九年の改訂版をテキストに使用し、一部削除され湯浅道男の解説が加わった。

⑮山歩き山暮し 西丸震哉 二〇一頁 二八〇円 昭和五十五年九月十日発行 中央公論社

著者の文章を読んでいるといつもホントかいなとか、まさかという言葉がまず口に出かってくる。また煙に巻かれたかと思いがらもつて夢中になって読む。

ンガ・バルバートから今年計画しているナンガ・バルバートまで21回におよぶヒマラヤ遠征隊の名称が印刷されており、そのうち七つがR・メスナー氏の忌むという追悼登山でした。

⑯エベレスト遠征で山頂に立った者がマゾー、ディームベルガー、ルトキエヴィッチなど大勢だったことは記憶に新しいところで

んでしまふ。不思議な魅力を持つ本である。元版は同じ出版社から昭和四十九年七月に出た。解説は串田孫一が執筆。

⑯わが山山 深田久弥 二二三頁 三〇〇円 昭和五十五年十月十日 中央公論社

著者最初の紀行・随筆集。収められている文章は大正の終りから昭和九年頃までのもので、明治三十六年生れの著者にとっては二十三歳から三十歳頃までの文章である。いかにも若々しく感受性豊かに山の魅力を語っている。元版は昭和九年改造社から出版された。文庫版に加えられた解説は山口耀久が書いている。

Geographical Contribution to a Periglacial Study of the Hielo Patagónico Norte with Special Reference to the Glacial Outburst Originated from Glacier-dammed Lago Arco, Chilean Patagonia
by Kaoru Tanaka

すが、ヘルリヒコッファア氏の率いる隊ができるだけ多くの隊員を山頂に立たせ、しかも無事故で引き返えそうとしているのはおわかりと思います。

このようなことを念頭において同じ会報のオーストリア アルペンクラブ百年祭の様子を見ていると面白いことがわかります。この集りでひんしゅくを買ったドイツ

一九五八年の神戸大学山岳会とチリ山岳会合同のバタゴニア探検では田中薫氏が担当した学術調査の報告が公表されていた。今回その報告書が田中氏によって一冊の本となった。

この隊には故高木正孝氏が登攀隊長として加わり、アレナレス山(三四三七七)に登っている。当時の会報に載った高木氏の便りには流れることなく急速に融けて大きな湖をつくる氷河のことが書かれている。このアルコ湖と名付けられた湖が、下流の村々に毎夏大洪水災害をもたらす源だったことを田中氏がつきとめた。急速に暖かくなって大氷河湖となり、氷河洪水を起こす氷河の実態が英文で報告されている。

(岡沢祐吉)
定価一五〇〇円 東京313センチター発売(千代田区集町二ノ一六ブルンネン半蔵門202号)

図書紹介

人のヘルリヒコッファア氏がなぜオーストリアの大学で名誉教授でいられ、イタリア国籍のR・メスナー氏がもてはやされたのか。近年自己中心的、ジャーナリスティックになりがちなR・メスナー氏と異なり、この百年祭に出席していたティヒ博士の顔はちらと見えただけだったといったことなど。(岡沢祐吉)

委員会報告

・平ヶ岳高山植物探索行

昭和五十五年八月十日～十一日

科学研究委員会

昭和五十五年度夏の行事として、私どもは平ヶ岳へ北面の中ノ岐林道から登って高山植物を探索計画を立てた。前年暮から終始協力頂いたのは片岡博会員で、基地となる銀山平の奥只見山岳会的小屋や、高山植物の講師である小出中学の柳一成教諭、あるいは湯之谷村などとの交渉を一手に引き受けて下さった。

八月十日(土)午後一時、一行六十三名は湯之谷村福祉センターに集合、柳先生はじめ湯之谷村理科教育センターの先生方から、スライド付で平ヶ岳の自然について行き届いた解説を伺った。夕刻銀山平に着くと、会場にはすでに湯之谷村役場のテントが張られ、傍らでは奥只見山岳会員と越後支部の国鉄グループが中心となり、諸準備や御馳走作りに大童であった。そして伝之助小屋、三溪荘、庄之助小屋からも、あるいは部屋、あるいは仕出し、あるいはお酒の差し入れなどの協力の申し入れがあった。

懇親会には湯之谷村の星彦三郎村長や星正和教育長(奥只見山岳会長)、伝之助小屋の佐藤広文氏なども出席され、遠路関西支部から参加の小川、入谷、池田会員や

静岡の石間会員、あるいは地元越後支部の斉藤支部長はじめ七十六歳の藤島玄、野沢健吉両会員などもまじえ歓談が始まった。豊富な地酒とアカウオの甘煮、ナガオカナスのシギヤキ、ヒヤヤッコ、山菜などの御馳走に談笑は夜遅くまで続いた。

この年は例年にない冷夏で、平ヶ岳付近でも前日まで十数日にわたって雨が降り続き、雪害を受けた中ノ岐林道の補修は八月上旬になつてようやく完了という有様であった。しかし全く幸運にも八月十日(日)は雲一つない快晴に恵まれ、全員四時起床、マイクロバスで林道終点に向った。ここには長岡国鉄グループの一隊が前夜からテントで待機していて、私どものためにあたためたかいナメコ汁を用意して待っていて下さった。参加者六十三名は七班に分かれて勇躍出発した。先頭と後尾には常に山田博氏など奥只見山岳会員と松木氏などの国鉄長岡グループの方たちに付いて頂いた。また映彩山岳会の上村氏他十一名、水原山の会の坂井氏他五名、長岡ハイキングクラブの室賀氏他五名、ならびに理科教育センターのメンバーなどとは随時相前後し、互いに話し合い

追悼

竹中 昇君を悼む

一月十三日の朝刊は各紙とも彼の墜死をつたえていた。

その記事は一瞬目を活字に釘づけにするほどの驚きと、そして間をおいて悲しみと傷みの思いが、波だつて迫ってきた。

彼とのつき合ひは古いことではないが、ここ四、五年の間にかのりの頻度をもった行き来があったといえるだろう。

その一つは日本山岳会学生部の部報にもうかがが生えてしまっている小生の旧稿を載せる相談と、その二には二、三の遠征(最後のものはカラコルムのラカボシ)に使用したいむね希望のあった装備についてであった。

出身山岳部は異なるし、それに年令にも隔りがある。紙上記されている二十八歳というのも第二の驚きであった。二十八歳にして現役山岳部員というのは近來滅多に聞かないことだし稀少価値は充分だ。永年部員とでもいう称号ができればそれに該当するにちがいない。

彼の下宿が私の家と近かったこともあり、遠征から帰ってくると必ず撮影したフィルムを重たい器材もろとも拙宅へ運びこんで映し出してくれたりした。

自己の所属する山岳部の計画は勿論のこと、日本山岳会学生部の海外登山の立案、その実施など実に精力的に推進していったことを身近に知っていたし、その実行力は仲々のものであるとの噂も耳にしていた。

一つの山岳部を背負っているといった自負に溺れる男と思われるかもしれないが、彼は謙虚な性格をもっていた。謙遜そのものといってもよかった。もう一步踏みだしてもよさそうなの

のと、他人にはもどかしく感じさせるところがあった。

日本山岳会のチョモランマ遠征隊のメンバーにえらばれ、そして身体検査の結果はすされた。当人はがっかりしたことだろうが、それをきいた時筆者はああよかったなと思ったのである。人の不運を喜んでのことでは万々ないが、私にはある予感があって、それが次第に発酵してきてどうしても消えてなくならないのである。

「この男エベレスト(チョモランマ)へ征つたら還つてこれないな」という不吉な感じが頭をさらさない。バカな!! という人もあろう、そして私自身も打ち消そう打ち消そうと試みたが、彼につきまとう影はどうしてもふききれなかった。暗い影は彼から離れてゆかないのだ。

あげ句、とうとうやられてしまった。このたびの植村隊に参加するとの話は全く知らされていなかった。もしも知らされていたとしても反対はできなかったろうし、反対すべき科学的なそしてその他の根拠は何もないのだ。幸運を祈るとしかいえなかっただろう。

運か不運か、ツイテいるかツイテいないか、誰も判らないことだ。ただ「好漢再び還らず」という転結の句のみが心の奥底に突き刺さったまま時は流れてゆくだろう。

多くの友人達が彼の将来に期待をもっていたように、筆者もその一人なのだが、まったく惜しい人物をなくしてしまった。

光芒をひきつつ消えさつたというか、薫りと光り漂う霧氷の中に沈んでいったというべきか、叩うべき言葉の足りなさを嘆くのみである。一八一・一・二二一 (初見一雄)

竹中昇君の遺稿

近藤信行

ながら歩を進めた。この結果地元側五十名、総勢一三三名の大部隊の行進となった。

山麓にもツルリンドウ、コイチヨウラン、ヨツバヒヨドリなどの花が見られたが、山頂付近の大湿原に着いてみると、タテヤマリンドウ、ハクサンフウロ、イワイチヨウ、モミジカラマツ、キンコチドリ、ワタスゲ、モウセンゴケなど次々に満開の高山植物が現われた。玉子石は下部が侵蝕されて、台の上に玉子がのこったような珍らしい形の石で、そのまわりに広がる湿原には、青空を映してトルコ石のように輝く池塘がちらばっていた。湿原やツガの廊下を通り二一四〇坪の山頂に立つと、越後三山をはじめ巻機山、谷川岳、越後から日光白根に至る山々が一望の下に見渡され、まさに天上の楽園であった。頂上の広大な草原に散らばってゆっくりと昼食をとる。姫ヶ池をまわって玉子石分岐に戻って見ると、思いかけぬ大きな西瓜が待ち受けていた。長岡ハイキングクラブの会員が十数個かつぎあげてくれたもので、その美味しさは生涯忘れられないものとなった。

十四時、山麓着。マイクロバスで折立温泉「ゆのたに荘」に直行して温泉に浸り、湯の谷村から差し入れのビールで乾杯、山菜井に舌つづみをうち、ここに一つがな山行は完了した。

翌十一日(月)も天気に恵まれ、有志はそれぞれ末丈岳や荒沢岳に遊んで英気を養うことができたが、今回の素晴らしい山行に際し、絶大なる御尽力を頂いた前記地元の多くの皆様、ならびに御協力頂いた集會、総務、自然保護各委員の諸兄姉に心から御礼申し上げる次第です。(中村純二)

・樽酒を囲んで

忘年会報告——

婦人懇談会

十二月十九日の忘年会は、五十九名の参加を得、ルームで開かれた。

「忘年会」を辞典で引くと「その年の苦しみを忘れること」と書いてある。やはりそれには「お酒」それも日本酒「ケダナルナート」登山隊の時にもお世話になった、宮沢郁さんにお願ひし、割安の料金で一斗樽を調達することができた。お料理は今までと嗜好を変えておでんと焼とり、おにぎり、その他生野菜などなど、シンプルにした。お料理のほとんどが終わり、どうやら皆様にご満足いただけたのではないかと安堵しております。

樽酒はなんといっても鏡開き、これは佐藤テルさんにお願ひし、乾杯は、副会長の渡辺兵力氏の音頭で開催、盛会でした。

また、ソ連スポーツ委員会、国際登山キャンプチーフ、モナルテ

日本冬期エベレスト登山隊に参加していた竹中君の計報をきいた翌々日、BC発信の彼の手紙がまいこんで来た。元旦付の書面で、ルートワークからいったんBCにもどって英気を養っている旨の内容だった。それを読んで、かえって悲しみに堪えなかった。

彼は早大教育学部の八年生で、今年はどうしても卒業したいと言い、浜野吉生さんと小生の教室にきていた。左に紹介する文章は、エベレストに出かけたおり、パンコックから送ってきたレポートの全文である。彼の山にかけた情熱の一端をよくつたえている。

旅寝の中で

竹中 昇

芭蕉の旅、それは私の旅の一つの大きな動機であった。「おくのほそみち」の「二振」の項を読んでは、冬の親しらずの檜ヶ岳への路を辿ったし、早春の一振、親しらずの海浜をさすらったこともあった。単なる地理的なトレースは易しいことであるが、芭蕉の厳しい、進取に富んだ旅を実感して感じることは、未熟な私にはまだとてもではしれない。私は今簡易的に山登りにめり込んでいる。雪の黒部、カラコルム、ヒンズー・クワシ、ガルワル、カシミールと岩を攀じ、山稜を辿り続けているが、それらが今一つ自律的な行動となっていない。その因は何なのかよくわからないが、私の行動の大きな欠点、は、思考性の欠けであることは理解しているつもりである。

イスキー氏他二名のお客様も加わり、会は一層なごやかな雰囲気の中で進められて行きました。

なお、不慣れなことから、不備不手際がございましたことを深くお詫言するとともに、御協力心から感謝申し上げます。

・参加者 (当日の名簿記載順)

浜野正男、岡部みち子、菅見愛子、早川瑞璃子、小原晴子、杉山都子、高橋美津栄、小塩丘平、村松紀夫、渡辺兵力、宅間清子、高橋照、太田敬、鈴木郭之、佐藤テル、堀内章雄、折井健一、堀川清、中村小一郎、島田興、加藤節子、根本知子、山口節子、佐々保雄、田中清子、高本信子、入沢郁夫、山崎安治、山田靖子、広羽清、小林碧、細川沙多子、吉沢一郎、中川武、進藤波男、斎藤敏男、飯野亨、若林幸子、土井高夫、谷村久美代、

芭蕉の旅の軌跡は、彼の成長の軌跡でもあった。それは芭蕉の成した五つの紀行文を見て、読んでいればわかる。「野ざらし紀行」から「おくのほそみち」の芭蕉の四十代は、彼の文学的エネルギーが見事に発散、昇華されている時である。「野ざらし紀行」の紀行文としての構築の未熟さは、「おくのほそみち」で解消され、雄大な敘情性に富んだ紀行文文学となっている。芭蕉にとつて旅とは研鑽の場であった。私の旅もそうでありたいと思い続けて来たが、どうしてそれよりもかなりのローレベルな所から抜け出せることはできなかった。どの旅にも甘えが生じていた。

鴨の長明の「方丈記」、中世の隠とん者の記であるが、芭蕉には隠とん者を全く感じない。長明の甘き逃げの姿勢は芭蕉の詩、旅にはない。琵琶湖のほとり国分山の麓、幻住庵で、芭蕉は「おくのほそみち」の旅後、一時を過ごす。長明の方丈は、幻住庵と牛尾山系を隔てた山科の里日野山にあった。芭蕉の幻住庵における生活は隠棲にはちがいがなかったが、長明のごとき隠とんでは決してなかったように思う。

私の旅は、どこかに長明的な隠とんの気がある。長明の逃げ、私にもそれがあつたのである。長明は逃げ続け、日野の山中に方丈を作った。私は逃げ続け、山から山へと渡る。芭蕉の旅とは懸隔の差がある。それは、逃避と進取との差である。

今冬、私は誘われて冬のエベレストに行く。チョモランマには肝炎のため参加できなかっただけに、是非とも登りたいと思う。参加のきっかけは他律的ではあったが、これを何とか自律的な登山活動としたいと思っている。そして、何よりも長明的な逃げから脱し、芭蕉の旅に少しでも近づく機にしたいと、私は念じている。——一九八〇・十・十九——

(パンコックにて)

- 15 石井貞男著「カナディアンロッキー—氷雪の山々を登る」
岳書房 1980 (版元寄贈)
- 16 金久昌兼著「北山の峠(下)—京都から若狭・丹後へ」ナカニ
シヤ出版 1980 (版元寄贈)
- 17 佐藤テル著「誰でも行ける楽しいヒマラヤ」新樹社 1980
(著者寄贈)
- 18 瓜生卓造「日本山岳文学史」東京新聞出版局 1980 (版元寄
贈)
- 19 齊藤一男著「岩と人—日本岩壁登攀史」東京新聞出版局
1980 (版元寄贈)
- 20 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座 1・アルピニズ
ム I」東京新聞出版局 1980 (版元寄贈)
- 21 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座 3・技術と用具
I」東京新聞出版局 1980 (版元寄贈)
- 22 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座 4・技術と用具
II」東京新聞出版局 1980 (版元寄贈)
- 23 東京学芸大学山岳部「編鹿島槍太田正信君遭難事故報告書」
1980 (編者寄贈)
- 24 ミシユル・ヴォシユ著/近藤等訳/ガストン・レヴィユフ監
修「ヴェリス・アルプス特選 100 コース」山と溪谷社 1980
(版元寄贈)
- 25 日本山岳会婦人懇談会編「日本山岳会女子ガルワルヒマラヤ
登山隊報告書 1980」1980 (編者寄贈)
- 26 エドワード・ウインパー著/H.E.G. ティンダル編/新島義
昭訳「完訳アルプス登攀記 1860—69 年」森林書房 1980
(版元寄贈)
- 27 服部孝司著「頂上には誰がために」山と溪谷社 1981 (版元寄
贈)
- 昭和 56 年 1 月受入図書
- 1 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座 2 アルピニズ
ム II」東京新聞出版局 1980 (版元寄贈)
 - 2 徳久・塚本・湯浅・雁部監修「新岳人講座 8 山と文学」東京
新聞出版局 1980 (版元寄贈)
 - 3 柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘編「日本登山大系 1 北海道、東
北の山」白水社 1980 (版元寄贈)
 - 4 柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘編「日本登山大系 3 谷川岳」白
水社 1980 (版元寄贈)
 - 5 柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉弘編「日本登山大系 7 槍ヶ岳・穂
高岳」白水社 1980 (版元寄贈)
 - 6 山学同志会カンチェンジュンガ登山隊編「Kangchenjunga
8598 m—カンチェンジュンガ北壁・無酸素登頂の記録」1980
(小西政雄氏寄贈)
 - 7 ACC 海外登山研究会編「未踏の氷河—ランゲル山地ナベス
ナ氷河東部登山報告書」1980 (中西義博氏寄贈)
 - 8 西丸震哉著「山の博物誌」実業之日本社 1981 (版元寄贈)
 - 9 金崎誠編「シンポジウム・ネパール」日本ネパール協会
1980 (版元寄贈)

田村俊介、永川憲明、松永康子、
堀井昌子、佐藤知恵子、佐村雄三
千葉保之、荒野康子、斎藤かつら
勝田房治、和久井正明、河村憲二
峰高正行、西堀栄三郎、福井正吉
三田幸夫、田口二郎、村山雅美、
市村洋子 (以上五十九名)
(市村洋子)

・80 年忘年会

十二月二十日(土) 午後七時
～十時 本会ルーム
青年懇談会

とかく飲み会が続く十二月。そ
れも土曜日とあって、会がカチ合
うもの続出と聞きおよんで、参加
者が減るのではないかといささか
心配だったが、そこは山岳会きつ
ての酒飲み集団、堂々三十三人が
集合して腰が抜けるまで騒ぎまく
った。

高橋理事が河岸から仕入れてき
た八十のタイ、タコ、マグロ、
サザエなどを小川さんが得意の包
丁で巧みにさばき、大倉さんが、
恒例のオデンの仕込み。滝さんが
伊那からお菓子をかかえて上京す
るなど大がかりな準備のため開会
は三十分遅れたが、それを補って
余りある料理がデーンと並んだ。
加えて酒飲み放題。これで会費三
千円也。

山崎さんの「青葱は昔から飲む
のが第一目的」というハッパを受
けて、酒がみるみるうちに無くな
っていく。歌が出ると、例によっ

て中川さんの音頭で一層バカ騒ぎ
になる。折井さん、飯野さん、金
坂さんら「名誉会員」も、とって
おきの歌を聞かせてくれて、あっ
という間に散会の時間が来てしま
った。

出席者(順不同) 大倉昌身 小
川武 高橋聡 岡島成行 今村千
秋 飯野享 酒井守 神崎忠男
桜井明 中川武 倭島進 絹川祥
夫 村木富士 島海宣和 小原俊
西村政晃 飯塚洋二 三沢幸夫
滝敏之 金坂一郎 堀内章雄 坂
本正智 錦織英夫 山崎安治 折
井健一 北島光子 岡沢祐吉 杉
山都子 勝山康雄 橋本清 齊藤
桂 堂本暁子 佐村雄三
(岡島成行)

会務報告

評議員会

(2月5日、午後6時30分
本会 ルーム)

出席者 大塚博美、織内信彦、
小原晴子、太田敬、近藤信行、
佐藤テル、田口二郎、高遠宏、
山本朋三郎、望月達夫、水野政
博、山崎安治、村木潤次郎。
西堀会長、折井、渡辺副会長長。
(委任) 金坂一郎、木下是雄。
(陪席理事) 中川武、川上隆、
高橋聡。

出席評議員から、望月評議員が
議長に選出されて、議事を進行
した。

▽議案

次年度(昭和56年・57年度)の
理事、監事候補者推薦の件。
推薦の方法について①懇談会

②小委員会③会長一任等々意見
が交わされたが、次の通りに取
り運ぶことに決定した。

(一)会長、副会長候補者について
は、書面をもって会長宛に提
出する。これを勧奨して、会
長、副会長で協議の上、改
めて評議員会に提示検討する
こと。

(二)其他、理事・監事については
原案を会長、副会長に付記
して、評議員会に提出の上、
候補者を決定する。

◎次回、評議員会は追って通知

ルーム日誌

(56年1月)

12月(月) 理事会
19日(月) 図書委員会
21日(水) 三水会
23日(金) 婦人懇談会新年会
29日(木) 山研委員会
今月の来室者 253名

会員移動(1月)

退会
六〇一三 山田 宗良
物故
一九一七 磯野 三郎(一月十二
日)
五八二二 滝浪 善一(五十五年
十二月九日)
八二三五 竹中 昇(二月十二日)

図書受入報告

図書委員会

第13回山岳図書交換会買上げ図書(つづき)

- 13 L. クラーク著 水谷準訳「謎の山アムネマチン」ベースポ
ールマガジン社 昭34
 - 14 J. マッカラム著 青柳健訳「エベレスト日記」二見書房
昭42
 - 15 「新編・日本山岳名著全集・3」三笠書房 1975
 - 16 「世界山岳全集・4」朋文堂 昭36
- 昭和55年11~12月受入図書
- 1 本田靖春著「栄光の叛逆者小西政経の軌跡」山と溪谷社
1980(版元寄贈)
 - 2 佐瀬稔著「狼は帰らずーアルピニスト森田勝の生と死ー」山
と溪谷社 1980(版元寄贈)
 - 3 美坂哲男著「山のいで湯行脚」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
 - 4 大阪市立大学山岳会「ランタン・リルン 7246m」1980(西
堀栄三郎氏寄贈)

- 5 イヴォン・シュイナード著/坂下直枝訳「アイスクライミ
ング」山と溪谷社 1980(版元寄贈)
- 6 島田・串田・山崎・近藤編「小島島水全雄・第8巻」大修館
書店 1980(版元寄贈)
- 7 三田幸夫著「わが登高行下巻」茗溪堂 1980(版元寄贈)
- 8 日本山岳会「山日記 1981年版」茗溪堂 1980(編者寄贈)
- 9 立正大学カラコルム登山隊「Linksar-I・1979」1980(著者
寄贈)
- 10 小森康行「ヨーロッパアルプス」朝日ソノラマ編集部 1980
(今井章氏寄贈)
- 11 坂原忠清著「未知なる頂へ・ビンドゥゴルゾム登頂報告書」
スピダーニエ同人 1980(著者寄贈)
- 12 高木泰夫編「ヒンズー・クシュ カラコルム研究誌」日本ヒ
ンズー・クシュ カラコルム会議 1980(編者寄贈)
- 13 高木泰夫編「ヒンズー・クシュ カラコルム登山探検誌」日
本ヒンズー・クシュ カラコルム会議 1980(編者寄贈)
- 14 望月達夫著「折々の山」茗溪堂 1980(版元寄贈)

ヨーロッパ・アルプス・オートルート大募集!

オートルート大募集(各15名 ガイド同行)

4月25日(土)16日間 ¥498,000

ツヤモニ〜ツェルマット〜ザスフィ完全走破(上級者向)

4月25日(土)12日間 ¥468,000

ベルビエ〜ツェルマット間(中級者向)

運輸大臣登録旅行業代理店業第2809号 世界山岳旅行クラブ

●企画: (株)マウンテン・トリップ

〒150 東京都渋谷区渋谷 3-14-4 股部ビル3F

☎03-407-0466(代)担当/神田・藤原・ラナ

印刷所

株式会社 技報堂

昭和五十六年三月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビュウハイソウ四番町
発行所 法人 日本山岳会
編集代表 岡 沢 祐 吉
電話東京(03)四四三三
振替口座東京三三三九
東京都港区赤坂一丁目三番六号

●語句の訂正 会報42号8頁上段
13行目蚊は蛇に、3段4行目少な
くないは少ないに訂正下さい。

~81・《7/16(木)~8/14(金)30日間》
パミール山脈(募集定員10名)

学術調査登山隊

- レーニン峰(7,134m)登頂
- 国際パミールキャンプ参加
- その他5,000~6,000m級登頂可能
=ソ連の山と旅の専門旅行社=

案内書呈 (株)日ソ旅行社 政府登録一般
第98号
☎404-1751(代) | 〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷 1-20-1
担当: 石元広昭 | パークアベニュービル。

Tシャツ実費頒布について
若い会員からの要望でデザ
イン2種を一組にし、二千五
百円の特別価格でお分けしま
す。申込みはお早く 事務局